

目次

まえがき 3

序章 いま日本が必要とする対外言語戦略とはなにか
鈴木 孝夫 10

第1部「教育」 グローバル時代の高等教育への批判 19

第1章
グローバル人材育成のために
— 社会と教育の果たすべき責任とは
當作 靖彦 20

第2章
グローバル人材育成政策と大学人の良識
大木 充 48

第3章
言語教育はどのくらい経済成長の役に立つのか
— オーストラリアの事例から考える
嶋津 拓 80

第2部「人」 グローバル社会を生きる若者たちへの視座 99

第4章

「グローバル人材」の育成はオールジャパンで

— 青年海外協力隊事業をめぐる杞憂と夢想

佐久間 勝彦 100

第5章

「グローバル市民」の「ことば」の教育とは

— 接続可能な社会と媒体としての個人

福島 青史 138

第6章

「グローバル人材」と「^{グローバルな}地球的人材」との距離

— 「国際ボランティア」日本語教師のキャリア意識をめぐる考察

平畑 奈美 169

第3部「政策」 国際化に向けた言語教育政策への提言 201

第7章

グローバル化時代のグローカル人材育成と日本語教育

尾崎 明人 202

第8章

私事化する教育と言語教育の可能性

— グローバル人材に欠けるものは何か

西山 教行 233

鼎談

グローバル人材と日本語

— 日本の国際化を担う人材が磨くべき言語能力とは

257

鈴木 孝夫 當作 靖彦 大木 充
コメンテーター 西山 教行
司会 平畑 奈美

フランスと日本の自国語普及政策をめぐって

— あとがきにかえて

西山 教行 291

いま日本が必要とする 対外言語戦略とはなにか

鈴木 孝夫

ことばを武器として考える発想の必要性

多少の揺らぎはあるものの、私たちの国日本は、このところ経済・技術力の点では、数少ない超大国の一員と目されている。しかし歴史的に世界を見ると、これまでの超大国はすべて軍事大国でもあった。そしてあまり注意されていないことは、ほとんどの超大国が言語の点でも強大な影響力を、近隣諸国はもちろんのこと、広く世界に及ぼすのが普通だったという事実である。

このことは古代ローマやサラセン帝国は言うまでもなく、近現代の超大国であったイギリス、フランス、スペイン、そしてロシアなどが、現在でも広大な自国語の流通圏を国外に保持していることを見ても明らかであろう。ところがいまの日本は一応の超大国でありながら、攻撃的な軍事力も持たず、世界に対して有効な言語力の行使もできないという、経済・技術力のみの一足のかかし案山子にも比すべき、まさに「ひ弱な超大国」「fragile superpower」でしかない。

日本人が、現在のような平和と繁栄をこれからも維持したいと思うならば、軍事力の問題はさておき、せめて現在では無きに等しい言語力の強化、すなわち「徹底した情報収集、粘り強い宣伝、そして巧みな説得」などを総合した対外言語戦略を構築して、日本の国益を守ることを真剣に考えなくてはならない。これこそが、私の30年来主張してきた「武器としてのことば」の骨子なのである。

日本語と外国語は言語戦略の2本柱で、車の両輪の関係にある

日本は、ほぼ1964年を境に、文明の性格が、それ以前は他律型文明

グローバル人材育成のために

— 社会と教育の果たすべき責任とは

當作 靖彦

1. はじめに

テクノロジーの発展が世界を大きく変え、いわゆるグローバル化が進行し、日本を取り巻く状況は、日本が大きな経済発展を遂げた20世紀後半とは様相をすっかり変えている。新しい世界の状況に対応することが要求されているにも関わらず、日本は、「内向き・後ろ向き・下向き」という言葉に代表されるように、外の世界と効果的に連携することが要求される時代への対応に苦慮し、前向きな態度でグローバル化に対応できず、新しい時代で発展することに苦勞している。そのような中で、グローバル化に対応できる人材、いわゆる「グローバル人材」の育成の必要性が強く叫ばれている。日本を取り巻く世界は変化し続け、新しい形の競争が起これ、グローバル化に対応できる人材を輩出する必要があるが、「グローバル人材」が育成されていないことが指摘されている。

本章では、グローバル化とは何か、グローバル化により社会がどのように変化してきているかをまず概観する。次に、グローバル社会を生産的に生きるためにどのような能力が必要かを考えてみる。筆者が現在住んでいるアメリカの教育を例に取り上げ、「グローバル人材」が必要とする知識、能力、資質に関する議論を概観する。人を育てるのは教育の仕事である。日本で「グローバル人材」が生まれにくい大きな理由は日本の教育に問題があるからだと考えられる。そこで、具体的に大学受験が重要な位置を占める日本の教育の現状を取り上げ、それが「グローバル人材」の育成をいかに妨げているかを考えてみる。

最後に、「グローバル人材」を育成し、さらにグローバル化に対応していく

グローバル人材育成政策と 大学人の良識

大木 充

1. はじめに

大部分の大学は、世の中のグローバル化に対応するため、大学の生き残りをかけて、また予算を獲得するために最近の政府主導のグローバル人材育成政策に過剰に反応している。また、この政策は、さまざまな世間の批判を受けている。そこで、まず政府主導のグローバル人材育成政策に、大学人はどのように対処すればいいのかを考える。そして、問われているのは政府主導の政策の是非ではなくて、大学人の良識と見識であることを指摘する。つぎに、グローバル化した現代社会において、大学ではどのような言語能力を養成すればいいのかを考える。大部分の日本の学生に必要なのは、高いレベルの言語運用能力ではなくて、「偏見をなくし、お互いへの関心と寛容の精神を育むのに貢献する」異文化間能力である。最後に、欧州評議会の言語政策に基づいてヨーロッパで始められた「異文化間的目的を考慮した外国語の授業」や「異文化間教育」が、日本語と日本文化を絶対視せず、相対化して、新たな視点で見直すことのできるグローバル人材育成に役立つということを述べる。

2. 政府主導のグローバル人材育成に対して問われている大学人の良識と見識

政府主導のグローバル人材育成にはさまざまあるが、ここでは2012年に始まった文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」について述べる。それは、この事業がそれまでの政府主導のグローバル人材育成構想の集大成ともいべきものであるからである。この事業は、2011年に「新成長戦略実現会議」の下に設置された「グローバル人材育成推進会議」の「中間まとめ」に書

言語教育はどのくらい経済成長の役に立つのか

— オーストラリアの事例から考える

嶋津 拓

1. はじめに

2014年元旦の朝日新聞（東京版）は、「教育 2014」という連載記事の一環として、1面トップに「グローバルって何」という標題の記事を載せた。これは、「少子高齢化が進む日本」で、「海外に経済成長の活路を見いだそうと、政府は英語教育の強化」を打ち出しているが、その現状に対して、「グローバル人材の育成という目的地は、語学の壁を越えたその先にある」という主張を含んだ記事だった。

この記事の中では、はじめに韓国の英語教育事情が紹介されている。すなわち、「1997年の通貨危機後、韓国政府は外貨を稼ぐ企業や人材を育てるため、英語教育にかじを切った」こと、そして、その動きの中で済州島に、「世界1%のグローバルリーダーを育てるアジア最高の英語教育都市」を建設する計画が進んでいることを紹介している。

つづけて、オーストラリアの言語教育事情が次のように紹介されている。

オーストラリアでは、87年から小中高での外国語教育が政策として始まった。白人を優遇する白豪主義を廃止し、多文化主義に転換した象徴として導入した。

その後、94年にアジア語重視が打ち出され、日中韓インドネシアの4ヵ国語について「小3から高1までの6割がいずれかを学ぶ」との目標が設定された。いま、豪州で最も盛んに教えられている外国語は日本語だ。全国に約30万人いる日本語学習者の9割以上が初中等教育で学んで

「グローバル人材」の育成は オールジャパンで

— 青年海外協力隊事業をめぐる杞憂と夢想

佐久間 勝彦

1. はじめに

2014年の元旦の朝日新聞は、教育問題を第一面トップにしているが、「グローバルって何」という小見出しに以下のようなリードの文を添えている。

少子高齢化が進む日本。海外に経済成長の活路を見いだそうと、政府は英語教育の強化を打ち出す。ただ、グローバル人材という目的地は、語学の壁を越えたその先にある。日本の教育は、世界をとらえられるか。

なかば流行語化している「グローバル人材」だが、その意味を十分明らかにすることは難しそうだ。個人的には、「人材」という表現にも抵抗がある。しかし、話を進めるために、便宜上、それを「(国際的な視野を持ち、)異質な他者に関心を寄せ、コミュニケーション、協働、共生のできる人、もしくはその努力をする人」と捉えたい。そして、本章では、その育成をオールジャパンで行うにはどうしたらよいかを考え、ひとつの方法として、国際協力機構(以下、「JICA」)の青年海外協力隊事業をとりあげる。主旨は、「グローバル人材」育成の公的なプログラムとしての協力隊有効利用の可能性を探ろうというものである¹。

2. 「グローバル人材」育成の難しさ

まず、「グローバル人材」の育成が容易でないことを、(1)目標設定の難しさ、(2)達成方法の難しさ、(3)覚悟形成の難しさの3つの観点から確認したい。

「グローバル市民」の 「ことば」の教育とは

— 接続可能な社会と媒体としての個人

福島 青史

1. はじめに — 「実感のない」日本の「グローバル化」

「グローバル化」という語は、特に冷戦終結以来、その意味を変容させながら広まった概念だと認識している。それはベルリンの壁の崩壊に象徴される、それまで「他者」として接触が制限されてきた人・世界との「出会い」から始まり、湾岸戦争における多国籍軍のような、国家、宗教を超えた「協働」、また、欧州連合とその拡大に見られる「他者」との「共存」など、生活を営む個人の日常に近い領域まで浸透してきた。今日、日本においても「生活者としての外国人」「留学生 30 万人計画」といった「グローバル化」に関する語彙は、個人レベルの生活を再記述し、「他者」との共存・協働を「現実」として私達に認識させようとしている。言い換えれば、目に見え、匂い、触ることのできる「他者」との、愛憎および無関心を孕む人間関係は、多くの人にとって、現実のものとなりつつある。

一方で日本に暮らしていると、「他者」の存在は確認できても、その「他者性」や「グローバル化」が現実的なものを感じられない人もいるだろう。なぜなら、日本語に保護された学校や職場では、「他者」は日本語を話すし、日本語がわからない「他者」は異なる空間に住んでいるからである。日本で日本語を使って暮らしている限り、コミュニケーションが保証されていると感じるかもしれない。しかし、近年繁殖する「グローバル」言説は、「日本人」「外国人」の区別が依拠する国民国家制に異なる次元を混入しているように見える。そもそも「グローバル」という語は、その語義から「日本／外国」という差の意味を失わせるからだ。以前、私達の前にいた「外国人」は片言の日本語を話し、異なる文化・習慣を持つ「他者」として表象されていた。しかし、現在、

「グローバル人材」と 「地球的人材」との距離

— 「国際ボランティア」日本語教師のキャリア意識をめぐる考察

平畑 奈美

1. はじめに

近年、日本は国際社会の中で難しい局面に立っている。その日本が抱える様々な問題を「救う」といわれているのが「グローバル人材」である¹。その実体は曖昧ながら、高い英語力を持ち、国際産業競争での日本の勝利に貢献できる人材を指すものとして、今日各所で使用されているのを散見する。本章においては、まず、このような「グローバル人材」が、真にグローバルな人材を指すのか、日本の問題を解決するのか、という点について疑義を呈する。

続いて、日本の問題解決に寄与するグローバルな人材としてのポテンシャルを持つ人々、具体的には、国際ボランティアとして、日本が過去半世紀にわたり世界各地に送り出してきたJICAの青年海外協力隊日本語教師に着目する。グローバル人材が脚光を浴びる中で、この歴史あるグローバルな人材への応募者は減少傾向にある。それでも国際ボランティアとして海外へ渡ることを選んだ人々は、この経験をどうとらえ、日本社会における自身の位置づけやキャリア形成をどのように考えているのだろうか。それについての調査の要約を報告し、そして最後に、日本を日本語で発信できる人材の育成が、これからの日本に開く可能性を論じる。

2. グローバル人材言説への疑問

2.1 「グローバル人材」という名の象

「グローバル人材」という言葉を、その本来の言葉の意味に立ち返って、「地球的人材」といい換えてみると、どのような人間がイメージされるだろうか。

グローバル化時代の グローバル人材育成と日本語教育

尾崎 明人

1. はじめに

日本を訪れた外国人観光客は2013年に史上初めて1000万人の万台に乗った。政府は、東京五輪が開催される2020年までに訪日観光客を2000万人にするという目標を掲げ、目標達成のために観光ビザ取得要件の緩和、多言語対応の強化などの促進策を進めるという。

外国人観光客の中には日本では英語が通じないと嘆く向きもあるようだが、日本人からすれば英語が通じない観光客の方が多いと考えた方がよさそうである。というのは、2013年の訪日観光客は、韓国、台湾、中国、香港の東アジア地域が約673万人（全体の65%）、ASEAN地域が約120万人（12%）と推定され、非英語圏からの来訪客がほぼ8割を占めているからだ¹。これらの国・地域からの観光客は必ずしも英語が分かる人ばかりではない。むしろ、ある程度日本語が分かる観光客が相当数いると思われる。

海外の日本語学習者は現在およそ400万人である²。過去に日本語を勉強したことがある人も世界中で数千万人に上るはずである。そして、その7、8割はアジアの人々である。外国人観光客の中には、勉強した日本語を是非日本で使ってみたいと思う人も少なくないだろう。中には日本訪問を契機に本格的に日本語の勉強を始める人もいるに違いない。

日本の観光に関するさまざまな情報を多言語で発信するのもいい。旅行者の安全、安心のために道路標識などを分かりやすい方式に変えるのもいい。しかし、外国人観光客と直接ことばを交わす日本人が、世界中からやって来る観光客の日本語のレベルに合わせて、にこやかに日本語で対応できたら喜ばれるに違いない。さらに、英語以外の外国語を日本人が少しでも学び、簡単な挨拶

私事化する教育と言語教育の可能性

— グローバル人材に欠けるものは何か

西山 教行

1. はじめに

本章では、グローバル人材育成の課題をややマクロな視点から考察したい。近年、話題になっているグローバル人材育成とは、従来の教育を刷新する教育的営為なのだろうか。あるいは、従来の国民教育の延長線に構想されたものだろうか。

上記の課題を考えるにあたり、本章では言語教育を重視する。第2章の大木論文が詳述するように、グローバル人材は、語学力、チャレンジ精神、異文化理解の3要素から構成されている。この中で言語教育のみが学校教育の中で特権的な位置を占めてきた。言語教育は教科教育の1つに統合され、評価を伴う教科として成立している。これに対して、チャレンジ精神の育成は学校教育の中でどのように実現するのだろうか。確かに、何らかの教育実践の結果、チャレンジ精神が育成されるかもしれないが、これのみを教科教育の内容とすることや、またその評価を実現することは容易ではない。また異文化理解についてもその評価は困難である。このような観点から、本章ではグローバル人材育成における言語教育の課題を考えることとする。

そこで、まず以下の3点を検討する必要がある。日本社会において教育、とりわけ言語教育はどのような位相に定められているのか。言語教育にはどのような役割が期待され、また実際、果たしているのか。さらに言語教育にはどのような可能性が託されているのか。本章前半では、これらの問いを改めて検討し、現代の日本社会で進行している「教育の私事化」の弊害を確認する。続けて後半では、国民教育から見た言語教育の役割を確認し、その上で、グロー

鼎談

グローバル人材と日本語

日本の国際化を担う人材が磨くべき言語能力とは



鈴木 孝夫



當作 靖彦



大木 充



コメンテーター

西山 教行



司会

平畑 奈美

*写真はすべて京都大学オープンコースウェア <<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/opencourse/75>> より。

はじめに ― グローバル人材に必要な言語能力とは

平畑：本日の鼎談の内容を、科研の中間研究報告として刊行する本の中に加え
ていこうと考えておまして、先鋭的な熱い議論を期待しているところです。
ですが、まず最初に会場からいただきました質問について、西山先生の方
から講演者の方々に質問を投げさせていただくところから始めたいと思います。

西山：全体を通じてみなさんから挙げられた問題というのは、やはり英語の問
題じゃないかと思いました。これは、鈴木先生や大木先生も、英語教育を日
本人全員にやる必要はないんじゃないか、いわば先鋭化した数少ない人間
に優れた英語教育や外国語教育を行い、鈴木先生になりますと、その方に
防人^{さきもり}になっていただきたい、との主旨でした。このような議論は先ほどのお
話の中でも、鈴木先生が取り上げられていましたように、1975年に平泉・渡
部論争の中で、日本人の5%に英語教育が必要だと、平泉渉参議院議員（当
時）が主張しました。最近では元マイクロソフトの社長が、『日本人の9割
に英語はいらない』という本を書き、その中で著者は、10%の日本人にとっ
て英語は必要だと言っております。その根拠は、「日本人で海外に駐在してい
る日本人、日本の中で観光業などでどうしても英語が必要となるような人間、
それと外資系企業で働く人間を加えた数がおおよそ10%であるから、彼らには
英語が必要だ。しかし、あとの残りの人には、英語はただちに必要ない」と
いうことです。こういう一方の議論で、さきほど大木先生が紹介しましたよ
うに、文科省では実際のところ10万人程度というかなり先鋭化した少ない
数の人間を、グローバル人材の可能性のある人材として提示しています。今
日はグローバル人材が議論になっていますが、グローバル人材というときに、
数少ない10万人を対象として、いわばエリート教育を考えることになるのか
どうか、これをもう少しお3人の先生方にお伺いしたいと思います。

それからもう1点は、日本語の問題です。日本語がグローバル人材とどの
ように結びつくのか。このグローバル人材育成という文科省の事業の中で、
日本語プラス外国語を唱えている大学は、今のところ非常に少ないのですが、
日本語はグローバル人材とどのように結びつくのでしょうか。

それから3点目として、お伺いしたいのは、グローバル人材のアイデンティ
ティとは何かということです。果たしてグローバル人材とは日本のことだけ